

高校野球 来春から「1週間500球以内」

賛

否

青森県内指導者

高校野球公式戦の投手球数制限について、日本高野連が来春の選抜大会からの適用を正式決定した。けが予防の観点から、1人の投手が「1週間で500球まで」と設定した。青森県内高校の指導者からは「選手を守るために必要」「指導者の意識改革になる」と賛意

があった一方、「球数の基準が分からない」「選手が投げたくても投げられない状況にならないか」と疑問視する声があった。県高野連が今秋実施した指導者へのアンケートでも賛否が分かれており、現場は歓迎ムード一色とはなっていない。

（林泰輔）

私立強豪

「意識改革に」「やむを得ない」

2010年に夏の甲子園に出場し、種市篤輝投手（千葉ロッテ）らプロ選手も輩出した八戸工大一高の長谷川菊雄監督は「投手の将来を考えれば、やむを得ない」と制度に一定の理解を示した。ただ、よりルールが厳しくなった場合を想定し



投手をけがから守ろうと日本高野連が打ち出した球数制限。青森県内の指導者は賛否が分かれた＝27日、八戸学院室内練習場

県高野連は10月、加盟校の受け止め方を知らうとアンケートを実施したところ、「賛否が分かれ、反対が多かった」（関係者）という。近く理事会で議題とし、加盟校に制度の詳細を周知する予定だ。

「将来的に1試合で何球と分らない」と指摘。「高けがのある選手、痛めやすい選手は考慮して起用している」と、制度の必要性に疑問を呈した。「部員は少ないが、1人に頼らないよう5、6人に投球の練習をさせており、けがをしないような指導はできている」とも語った。

医学的な見地からは、小中学校の指導者たちにも「子どもたちにけがをさせない」という意識付けが波及することを期待する声が上がった。年1回、県内各地で行う高校球児のメディカルチェックに携わる医師は「高校生に比べて小中学生は大会が多く、リーグ戦形式の大会では、一人の投手に負担が掛かってしまうことが多い」と指摘し、「高野連は権威のある団体。この考えが、小中学生たちの指導者にも浸透することを願う」と期待を込めた。

甲子園通算23勝、18歳以下日本代表のコーチ経験もある八戸学院光星高の仲井宗基監督は「指導者の意識を変えていくきっかけになる」と制限に賛同。「将来ある選手たちをけがから守るのが第一。チームへの責任感から、けがをすると分かっている投手もいる。規則が守られることにつながればいい」と指摘した。

別の県立高校野球部の部長は「普段から選手とコミュニケーションを取って、」

「選手が投げたくても投げられない状況にならないか」と疑問視する声があった。県高野連が今秋実施した指導者へのアンケートでも賛否が分かれており、現場は歓迎ムード一色とはなっていない。

「将来的に1試合で何球と分らない」と指摘。「高けがのある選手、痛めやすい選手は考慮して起用している」と、制度の必要性に疑問を呈した。「部員は少ないが、1人に頼らないよう5、6人に投球の練習をさせており、けがをしないような指導はできている」とも語った。

医学的な見地からは、小中学校の指導者たちにも「子どもたちにけがをさせない」という意識付けが波及することを期待する声が上がった。年1回、県内各地で行う高校球児のメディカルチェックに携わる医師は「高校生に比べて小中学生は大会が多く、リーグ戦形式の大会では、一人の投手に負担が掛かってしまうことが多い」と指摘し、「高野連は権威のある団体。この考えが、小中学生たちの指導者にも浸透することを願う」と期待を込めた。

別の県立高校野球部の部長は「普段から選手とコミュニケーションを取って、」

県立校「どのレベルのチーム想定？」